

半過去形の諸問題 : そのアスペクトと説明原理

著者	市川 雅己
雑誌名	文学部論叢
巻	98
ページ	121-132
発行年	2008-03-07
その他の言語のタイトル	Problemes de l'imparfait : ses aspects et son principe explicatif
URL	http://hdl.handle.net/2298/7994

〔論文〕

半過去形の諸問題 ——そのアスペクトと説明原理——

市川 雅己

Problèmes de l'imparfait ——ses aspects et son principe explicatif——

Masaki ICHIKAWA

La fonction de l'imparfait en tant que cette forme verbale construit des coordonnées semblables à celles du temps de l'énonciation mais dont les coordonnées seraient créées ailleurs qu'au moment de l'énonciation. De cette fonction, il résulte que l'imparfait n'est pas essentiellement un temps du passé.

Contrairement à l'opinion convaincante en apparence disant que son aspect serait imperfectif, il est en fait indéfini, parallèlement au présent qui est aussi indéterminé sur l'aspect; c'est le contexte même qui définit un à un l'aspect d'un emploi de l'imparfait.

Malgré sa longue portée, le schéma de Togo (2007) a de la difficulté à expliquer l'emploi narratif et les «modaux». La distinction adoptée par lui entre l'«imparfait de discours» et l'«imparfait de récit» n'est pas non plus pertinente. C'est toujours le contexte qui fait l'apparente séparation en jouant le premier rôle.

Les contraintes des verbes à l'imparfait forain et celui d'atténuation qui sont apparemment difficiles à expliquer par notre principe sont en réalité imposées par les actions qui succèdent à celles des verbes à ces imparfaits.

キーワード アスペクト、説明原理、本質的機能、文脈

はじめに

我々は市川(1988)(2003)で既に提唱した半過去形の本質的機能により、半過去形の多岐にわたる用法を整合的に説明できることを市川(2007)で主張した。本稿の目的は2つあり、1つは半過去形のアスペクトは現在形と並行的

に不定であること、もう1つは東郷(2007)で提唱された半過去形の説明の枠組みでは特に法的用法の半過去形の説明に困難を生ずるが、我々の説明原理によればかなりの程度整合的な説明が得られることである。

市川(2007)等でも述べたように、現代フランス語の半過去形の本質的機能については、多くの説が出され膨大な文献が存在する。この動詞形に関するこれまでの膨大な論考には大別して、この動詞形を本質的に過去時制の一つとする立場(過去説、IMBS 1960等)と、この動詞形の本質的機能が、ある場合には過去時制として発現し、別の文脈では婉曲や反実仮定の仮定や他の種々の働きをするものとして現われるとする立場(非過去説、DAMOURETTE & PICHON 1911-1950、DUCROT 1979、LE GOFFIC 1986等)とがある。ラテン語の過去時制の一つである未完了過去形からフランス語の半過去形が生じたという通時的視点からすれば、前者の立場にたつべきだということになろうが、共時的視点からすれば、この二つの立場の中どちらの立場にたつべきかは論証困難であり、公理的にいずれかの立場を是としてそれに依ってたたざるをえない。両者のいずれの立場が優れているかは、この動詞形の多岐にわたる用法をどちらがより整合的に説明しうるかにかかっている。我々は市川(1988)以来一貫して後者の非過去説の立場から種々の用法を説明しようとしてきた。以下の第1節では我々の提唱してきた半過去形の本質的機能について再度述べ、第2節では半過去形を現在形と並行的にとらえることにより、半過去形のアスペクトは現在形と同様に不定であると考えべきことを主張し、第3節では有力な説明の枠組みである東郷(2007)を紹介し、しかしこの枠組みでは半過去形の所謂法的用法を十全に説明し得ないことを示し、翻って我々の説明原理はこれらの用法を相当程度まで説明可能であることを主張する。最後に第4節で我々の説では一見説明困難な点を指摘し、その克服を展望する。

1. 半過去形の本質的機能

市川(1988 および 2003)は、半過去形の機能を次のように規定する。

半過去形は「発話空間(moi-ici-maintenant)とは異なる位置に発話空間とは別個の空間(coordonnées)を構築する。」

発話空間 (moi-ici-maintenant) とは異なる位置とは、発話空間とは別の位置に発話空間と同様の座標を構築するという意であり、ある文脈の下では時間軸上の過去の位置に、別の文脈では過去の位置ではなく発話空間とは別のどこかに空間を構築するということである。半過去形は本質的には過去時制ではないと考える (= 「非過去」)。更にそのアスペクトは「不定」である。

次節では、同じ非過去説の立場で有力な未完了アスペクト説の不都合を述べる。

2. 未完了アスペクト説の不都合

2.1. 未完了アスペクト説で説明困難な例

半過去形=非過去説中、支持の多いのがこの未完了アスペクト説である。確かに半過去形 (imparfait) という原語の呼称が「名は体を表わす」とすればうなずけるものである。しかし、半過去形の本質的機能が未完了アスペクトを表わすということからは、次のような用法を説明できない。

1. 物語の半過去形 (imp. narratif)

- (1) Vingt jours avant moi, le 15 août 1768 (sic), *naissait* dans une autre île, à l'autre extrémité de la France, l'homme qui a mis fin à l'ancienne société, Bonaparte. (Chateaubriand, *Mémoires d'outre tombe*)
- (2) Quatre heures après l'annonce de la mort de M. Brejinev, le comité central ainsi que le Conseil des ministres *assuraient* à la radio et à la télévision vouloir continuer la politique étrangère du président défunt, notamment en matière de détente et de désarmement. (*Le Figaro*, le 12-11-1982)
- (3) A la 33^e minute, Dremmler *descendait* Tigana; à la 39^e minute, Six *se prenait* de querelle avec Schumacher; à la 40^e Genghini *abattait* Kaltz et l'arbitre lui *infligeait* un carton jaune. (J.-P. Lacour, *Le Figaro*, le 9-7-1982)

2. 夢の描写の半過去形

- (4) Dans mon rêve, je *marchais* dans une vaste forêt, j'*avançais* à vive allure sur un chemin un peu boueux, je n'*étais* pas seul mais ce n'*était* pas toi qui

m'accompagnais... (LEBAUD 1994)

3. 愛情表現の半過去形 (imp. hypocoristique)

(5) Il *faisait* de grosses misères à sa maman, le vilain garçon. (DAMOURETTE & PICHON 1911-1940)

4. 間一髪の半過去形 (imp. d'imminence contrecarrée)

(6) Un peu de plus, et le train *dérailait*.

5. 時制の一致の半過去形・知覚動詞に導かれる従節中の半過去形

(7) Sylvie a dit qu'elle *venait* en voiture.

(8) J'ai vu que Petit *passait* le ballon à Zidane, qui *marquait* un but. (VET 2005)

6. 発言動詞 (verbes déclaratifs) の半過去形

(9) Le matelot, debout au pied du mur, *disait* : - Beau temps, monsieur.
(Maupassant, *Sur l'eau*)

未完了説では、これらの用法においては半過去形が本来もつと考える未完了アスペクトが文脈の働きにより現われないと説明せざるをえない。これらの文脈下で未完了アスペクトがなぜ発現しないのか、これらの用法の種々の文体的効果はどこから生ずるのかを説明するのは困難である。魅力的な未完了説であるが、半過去形の説明原理としては不十分である。

2.2. 現在形との並行性：現在形のアスペクトは不定

ここで現在形と半過去形との並行性を考慮しよう。第1節で述べたように、我々の説では半過去形は発話空間と異なる位置に別個の空間を構築するのであるが、過去における「継続」や「反復習慣」といった最もありふれた半過去形の用法では、時間軸上の過去の位置にその空間を構築すると考えられる。現在形はその一用法として発話時において行為を描き、半過去形はその一用法として過去の位置に構築した空間で行為を描くという類似の用法をもつこ

とから、この場合の半過去形は現在形を過去の向きに平行移動したと考えることは直感的にも極めて自然であろう。現在形と半過去形とはこのように幾つかの類似した用法を有している。

ところで現在形のアスペクトは決して未完了相や継続相のみではなく、以下の例のように完了相や他の種々のアスペクトを示すことがあるのである。

(10) J'accepte. / Il commence à pleuvoir. / Je viens te chercher.

(「～した」、完了相)

(11) L'eau bout à 100 degrés.(超時的)

(12) Carmen monte en croupe sur le cheval de José et ils s'éloignent.

(Mérimée, *Carmen*、ト書き)

現在形が本来、未完了アスペクトをもち、上記のような文脈下ではその未完了アスペクトが現われないと考えると、何がその発現を妨げているのか、また現在形が例えば完了アスペクトを示すのはどのようなメカニズムによるのかを説明するのに困難を生ずる。現在形自体は定まったアスペクトをもたず、様々な用例においてあるアスペクトを示すように見えるのは文脈の働きによると考える方がはるかに整合的である。

上記に示した現在形と半過去形との並行性から、現在形のアスペクトが不定であるなら半過去形のアスペクトも不定であり、種々のアスペクトを示すように見えるのは、実は文脈の働きによると考えるのは極めて自然である。半過去形のアスペクトは不定であると考えた方が種々の用法をより整合的に説明できるのである。

2.3. 現在形・半過去形の機能

上記のように、現在形のアスペクトは不定であると考えらるべきであるが、現在形の本質的機能は一体いかなるものであろうか。SERBAT(1988)が正しく主張するように、現在形は他の動詞形と比して形態素の欠如が特徴的であり、故に他の動詞形の守備範囲外の場を受け持つ、埋め草的な機能をもつと考える。現在形が発話時と常に結び付いているとは限らないことは、上例(11)

(12)等の用法をもつことから明らかである。

(13) il court : il cour- ϕ -t(d'après SERBAT 1988)

(14) il courait : il cour-ai-t

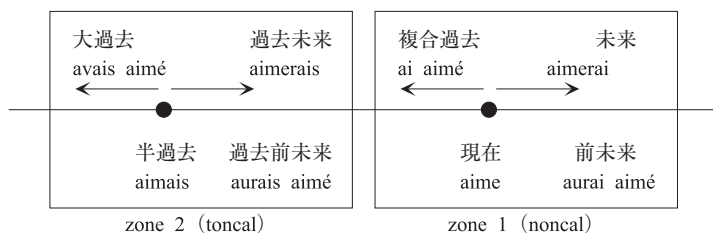
SERBAT(1988)の指摘のように、(13)(14)で現在形は例えば半過去形と比較して人称・数を示す形態素(-t)以外の形態素が空なのであり(ϕ)、したがって積極的な機能を果たすのではなく、上述のとおり他の動詞形の担当する以外の場を受け持ち、それ故にこそ多様な用法をもつのである。

他方、半過去形では活用語尾の一部(-ai-)こそが、第1節に示した発話空間とは別の空間の構築を担うのである。

3. 東郷(2007)の妥当性

3.1. フランス語時制の全体図式(cf. VET 2005)

東郷(2007)は以下のような時制記述の図式を提唱している。なお類似の図式をVET(2005)等も発表している。



(東郷2007)

上記の図式は次の主張を含んでいるとされる。

- (a) zone 1は「現在」を中核とする時制群である。zone 1に属する時制はすべて、「現在」の表す発話時点 t_0 に視点を置いて眺められた事態を述べる。
- (b) zone 2は、「半過去」を中核とする時制群である。zone 2に属する時制はすべて、「半過去」の表す過去の時点 t_1 に視点を置いて眺められた事態を述べる。

- (c) 視点を置くことができるのは、現在と半過去に限られる。その他の時制は、「基準点」にはなりえても、視点を置くことはできない。
- (d) 過去・現在・未来の三分法が定説となっているが、時制は zone 1 / zone 2 の二分法で考えるべきである。未来は独立の zone を形成しない。
- (e) zone 1 を時間軸に沿って過去方向に平行移動すると zone 2 が得られる。この意味で、zone 2 は zone 1 が過去に投影されたものである。半過去は文字通り「過去における現在」である。
- (f) 単純過去は上の図式に位置づけることができない。単純過去はこれとは別の原理によって機能する。
- (g) zone 1 と zone 2 とは断絶している。ここで言う「断絶」とは、異なる「世界」を構成しているという意味である。 (d'après 東郷 2007)

この説明には、「視点」の定義や(c)にある現在形と半過去形以外に視点を置けないのはなぜかや、未来が独立の zone を形成しない理由、「異なる世界を構成している」という記述の意味等、その根拠が十分に示されていないうらみがあるが、(e)の主張は時制の一致の文法規則から常識的でもあり、我々の主張とも合致するものである。また説明原理としての他の動詞形への射程の大きさの可能性は評価すべき点であろう。

しかし後述のように、この枠組みでは説明困難な半過去形の用法が幾つか存在するのである。

3.2. 「ふたつの半過去形」か? : «imp. de discours» / «imp. de récit»

(LE GUERN 1986)

東郷(2007)で説明困難な例を見る前に、東郷が支持している「半過去形には2種ある」という LE GUERN(1986)の主張に妥当性がないことを述べる。彼は半過去形には、発話時にはもはや成立していない事態を述べる imparfait de discours(例15)と過去時における事態を述べ発話時におけるその事態の成立について何もいわない中立の imparfait de récit(例16)との2種があると主張した。

- (15) Pierre qui *était* mon voisin au Canada, vient dîner ce soir. (imp. de discours)
 (16) Jacques commença l'histoire de ses amours. C'*était* l'après-dînée : il *faisait* un temps lourd ; son maître s'endormit. (imp. de récit)

しかしこの主張は半過去形自体の機能と文脈の働きとを混同したもので誤りである。以下の例で分かるように、半過去形自体の機能は不変であり、用法の別を決定し発話時における事態の成立の如何を決定するのは文脈なのである。動詞自体の機能のレベルと文脈のレベルとを峻別すること、文脈の働きにこれまで以上に注意を払うことが肝要である。

- (17) Un quart d'heure plus tard, M. Sigisbert *entraît* chez moi et me contait son aventure. (imp. narratif)
 (17') Un quart d'heure plus tard, M. Sigisbert *entraît* chez moi quand un coup de feu l'abattit sur le seuil de la porte. (通常の半過去形)

(TASMOWSKI-DE RYCK 1985 in BRES 2005)

上掲の最小対の例では、M. Sigisbert が話者の家の敷居をまたぎ終えたか否かは半過去形自体ではなく文脈が決定しているのであり、半過去形の機能自体には何の変わりもないのである。これと同様に、半過去の述べる事態が発話時にもなお成立し続けているか否かを決定するのも文脈なのであり、半過去形自体では決してないことを強調しておく。

3.3. 東郷(2007)が説明困難な用例

以下の例はこの図式では説明困難と考えられるものである。

1. 仮定節中の半過去形 (imp. d'hypothèse)

- (18) Si j'*étais* (de) toi, j'irais lui parler franchement. (LEBAUD 1994)

2. 愛情表現の半過去形 (imp. hypocoristique)

- (19) Ah! qu'il *était* joli joli, mon petit Maurice ! (WAGNER & PINCHON 1962)

(20) Comme tu *pleurais* fort ! comme il *était* triste ! (WILMET 1976 in SATO 1990)

3. 遊びの半過去形 (imp. préliminaire)

(21) Moi, j'*étais* le cowboy, toi, tu *étais* l'Indien.

(22) Alors tu *étais* la maman et j'*étais* le bébé, j'*avais* faim... (LEBAUD 1994)

4. 物語の半過去形 (imp. narratif) の文体的効果

(1) Vingt jours avant moi, le 15 août 1768 (sic), *naissait* dans une autre île, à l'autre extrémité de la France, l'homme qui a mis fin à l'ancienne société, Bonaparte. (Chateaubriand, *Mémoires d'outre tombe*)

(2) Quatre heures après l'annonce de la mort de M. Brejinev, le comité central ainsi que le Conseil des ministres *assuraient* à la radio et à la télévision vouloir continuer la politique étrangère du président défunt, notamment en matière de détente et de désarmement. (*Le Figaro*, le 12-11-1982)

(3) A la 33^e minute, Dremmler *descendait* Tigana; à la 39^e minute, Six *se prenait* de querelle avec Schumacher; à la 40^e Genghini *abattait* Kaltz et l'arbitre lui *infligeait* un carton jaune. (J.-P. Lacour, *Le Figaro*, le 9-7-1982)

5. 間一髪の半過去形 (imp. d'imminence contrecarrée)

(23) Une minute de plus, je *ratais* mon train.

上掲の、物語の半過去形と所謂法的用法と呼ばれる用法とをどのように説明するのかについての記述は東郷(2007)にはないが、私見では、過去時に「断絶」していた zone 2 が、これらの用法では過去時ではない他の位置に転用され設定される、としか説明できないであろう。するとこれは IMBS(1960)等の伝統的な説明と同様のものになってしまうのである。

4. 我々の説明原理が説明困難な点

では我々の説明原理で説明困難な例があるであろうか。以下の例には確かに説明に困難を覚える点がある。

1. 婉曲の半過去形 (imp. d'atténuation) における使用可能な動詞の制約：
vouloir, venir, désirer, chercher 等のみ使用可であること (ANSCOMBRE 2004)
- (24) Je *voulais* te dire quelque chose pendant que nous sommes seules. (LEBAUD 1994)
- (25) Je *venais* vous demander si vous ne pouviez pas baisser un peu le son.
(SCHOGT 1968 in 渡邊 2006)
2. 市場の半過去形 (imp. forain) における使用可能な動詞の制約：falloir, vouloir, avoir besoin, souhaiter 等のみ使用可であること (ANSCOMBRE 2004)
- (26) Et la petite dame qu'est-ce qu'elle *voulait* ?

これらの制約は東郷(2007)では特に困難なく説明可能であるように思われる。すなわち、半過去形は zone 2 の過去時において既になされた行為を記述するのであるから、過去時になされる可能性のある行為には上記のような制約があると説明できそうである。対して我々の説明原理では、半過去形は発話空間と別個の空間を構築するのであるから、そこには使用される動詞の制約はないように一見思われる。しかしこの行為はやはり発話時における聞き手に対する次なる働きかけにつながるものであるので、その働きかけを可能にするような前置的な行為にはやはり上記の制約が自ずと生ずると考えれば、我々の説明原理でも本質的な困難は生じないことが理解されるであろう。¹⁾

5. 結論

現在形との並行性から、半過去形のアスペクトは現在形と同様に不定である。

また、これまで見てきたように、半過去形の本質的機能についての我々の規定である、「半過去形は「発話空間 (moi-ici-maintenant) とは異なる位置に発話空間とは別個の空間 (coordonnées) を構築する。」により、半過去形の多岐にわたる用法を整合的に説明可能であり、東郷(2007)では説明困難と考えられる物語の半過去形や所謂法的用法をも説明可能である。

婉曲の半過去形や市場の半過去形における一見説明困難とみえる使用動詞

の制約も本質的な問題ではなく、発話の状況から説明可能であった。

冒頭に記したように、他の諸説によるよりもより整合的に種々の用法を説明可能であることこそが、我々の半過去形の規定の正当性を示すこととなるのである。

時制の「体系」が示差の体系であるとするれば、他の動詞形をも説明しうる、より大きな射程をもつ原理の構築が今後の課題である。

注

1) これらの用法では、半過去形よりむしろ現在形がより使用されることから、3人称主語の使用こそが決定的で、動詞形は補助的な役割しか担っていないことが看取できる。ある仏語母語話者の語感によれば、その効果は *théâtralisation* ともいうべきもので、実在のあるいは仮想的な観衆に向かって話者の愛情を披露することであるという。

Références bibliographiques

- ANSCOMBRE, J.-CL. (2004) «Imparfait d'atténuation. Quand parler à l'imparfait, c'est faire», *Langue française*, 142, pp.75-99.
- BRES, J. (2005) «L'imparfait : l'un et/ou le multiple? / A propos des imparfaits "narratif" et "d'hypothèse"», *Cahiers Chronos*, 14, pp.1-32.
- DAMOURETTE, J. & PICHON, E. (1911-1950) *Des mots à la pensée, Essai de grammaire de la langue française*, t.V., d'artrey.
- LABEAU, E. (2005) «Mon nom est narratif : imparfait narratif», *Cahiers Chronos*, 14, pp.79-102.
- LEBAUD, D. (1994) «L'imparfait, analyse linguistique en vue d'une conceptualisation en classe de FLE», *Le français langue étrangère à l'université/ théorie et pratique*, Actes du Colloque International de Varsovie, 25-26 novembre 1993, Instytut Romanistyki, Uniwersytet Warszawski, pp.217-230.
- LE GUERN, M. (1986) «Notes sur le verbe français», RÉMI-GIRAUD, S. & LE GUERN, M. (éds.), *Sur le verbe*, Presses Universitaires de Lyon, pp.9-60.
- LE GOFFIC, P. (1986) «Que l'imparfait n'est pas un temps du passé», *Points de vue sur l'imparfait*, Centre de publications de l'Université de Caen, pp.55-69.
- (1995) «La doubleincomplétude de l'imparfait», *Modèles linguistiques*, XVI, 1, pp.133-148.
- SATO, F. (1990) «Sur l'imparfait «hypocoristique»», *Sur les verbes français*, Hakuishisha, pp.103-123.
- SCHOET, H. G. (1968) *Le système verbal du français contemporain*, Mouton.
- SERBAT, G. (1988) «Le prétendu «présent» de l'indicatif : une forme non déictique du verbe», *L'information grammaticale*, no.38, pp.32-35.
- TASMOWSKI-DE RYCK, L. (1985) «L'imparfait avec et sans rupture», *Langue française*, 67, pp.59-77.
- VET, C. (2005) «L'imparfait : emploi anaphorique et emplois non anaphoriques», *Cahiers Chronos*, 14, pp.33-44.

- VETTERS, C. (1996) *Temps, aspect et narration*, Rodopi.
- DE VOGUÉ S. (1999) «L'imparfait aoristique, ni mutant ni commutant», *Cahiers de pragmatique*, 32, pp.43-69.
- WAGNER, R. L. & PINCHON, J. (1962) *Grammaire du français, classique et moderne*, Hachette.
- WILMET, M. (1976) *Etudes de morpho-syntaxe verbale*, Klincksieck.
- 阿部 宏(1989)「Je t'attendais 型の半過去について」、『フランス語学研究』第23号、pp.55-59.
- 市川 雅己(1988)「半過去の本質的機能について——「物語の半過去」(imparfait narratif)を通して——」、『筑波大学フランス語・フランス文学論集』第5号、pp.81-93.
- (2003)「-ais, -ais, -ait, -ions, -iez, -aient の機能」、『フランス文学論集』九州フランス文学会、第38号、pp.21-37.
- (2007)「半過去形のアポリア」、『文学部論叢』文学科篇、熊本大 文学部、第94号、pp.1-12.
- 東郷 雄二(2007)「Je t'attendais. 型半過去再考」、『フランス語学研究』第41号、pp.16-30.
- 渡邊 淳也(2006)「フランス語の「丁寧の半過去(imparfait de politesse)」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法との対照研究」、『文藝言語研究』言語篇 50、pp.41-84.